

## 日本統治下台湾人児童の日常生活について（その3） - - 教科書から見る台湾の産業発展 - -

著者	陳 虹?
雑誌名	平安女学院大学研究年報
号	19
ページ	31-40
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1475/00002391/">http://id.nii.ac.jp/1475/00002391/</a>

## 日本統治下台湾人児童の日常生活について(その3)

### — 教科書から見る台湾の産業発展 —

陳 虹彬

#### 要 旨

日本による台湾の植民地統治において、経済的な利益を獲得するのは重要な目標である。農産品や加工品の生産・製造に欠かせない労働力を育成するのに、台湾人児童向けの教育も必要となる。台湾人児童が通う初等教育機関「公学校」(のちに国民学校)の教育主旨でも「生活に必要な知識と技能を授けること」を目的の一つとして掲げられている。本稿はその主要科目である国語科の教科書を中心に、台湾における産業発展の時期に合わせ、産業や物産に関連する実学教材の変遷について考察を行った。特に、植民地時期において台湾の重要な生産品である「米、砂糖、茶、アルミニウム」等の教材を取り上げ、各時期における教材内容の変化と特徴を明らかにした。

本稿の考察を通し、産業関連教材の内容変遷は産業発展の流れに一致していることが確認できた。さらに、「茶」の教材は他の生産品とは異なり、海外への重要貿易商品として、砂糖や米に並び、国語読本に取り入れられていることもわかった。全体的にみれば、台湾人児童用の国語教科書は植民地現地の子供として学ぶべきものと、その実際の生活からかけ離れないように教材内容の取捨選択に配慮しているといえる。

#### はじめに

最近入手した一冊の写真集がある。1944年に朝日新聞社が編集・出版した「南方の拠点 台湾」である。台湾伝統の信仰の中心である「廟」という建物の上に、飛行機が飛んでいる表紙の写真はとても印象的である。中には台湾の風景や物産などの写真が多数掲載され、台湾はいくら豊かで「南進基地」としてふさわしいか、という宣伝のための写真集である。植民地としての台湾は、その土地と物産の豊かさを日本の需要に合わせて産業を発展させてきた。植民地期台湾の産業発展は前期と後期に分けることができる<sup>1)</sup>。前期は「農業台湾・工業日本」をもとに、台湾は農業を中心に米、砂糖などの農産品及び農産加工品を生産していた。後期は、1930年代からの日本情勢に応じ、台湾における軍事関連産業の工業化が進められ、現代化した重工業と化学工業(重化工業)が台湾に導入されるようになった。

上述した台湾の産業を発展させるには、労働力の育成が欠かせなかった。当時の台湾人児童が通う初等教育機関「公学校」(のちに国民学校)では、卒業後に高等科などへ進学できるのはごく一部の人であり、公学校を卒業したら、すぐに働き手となる生徒が大半であった。そのため、公学校の教育は日本語をはじめ、社会生活や経済活動などに関連する初歩的かつ実学的な知識を台湾人児童に教える役割を担うこととなっている。最も主要な教科である国語科の教科書にも、米、樟脳、砂糖、茶、果物等、台湾の物産や産業に関連する教材が数多く取り入れられている。特に台湾の重要農産品である「米」や「砂糖」などの教材は、教材の全面改訂が数回行われたにもかかわらず、植民統治が終了するまで国語教科書から外されることはなかった。

台湾人児童用の国語教科書について、植民地統治の50年間に於いて合計5期60冊の教科書が編集された<sup>2)</sup>。明治期、大正期には第一期と第二期の国語教科書、昭和初期には第三期の国語教科書、

1937年から植民地統治終了までは第四期と第五期の教科書が刊行されている。国語教科書の改訂時期は産業構造の変動に合致しているところから、その変化は教材に如何なる影響を与えているかについても検証する必要がある。本稿では台湾の産業に関する教材を中心に、日本統治期の台湾における農業、工業等の発展時期に合わせて、如何なる影響を与えているか検証を行うものとする。

## 1. 日本統治下台湾における産業の展開と沿革

前述した通り、日本統治下の台湾産業発展は1930年代を区切りに、前期は台湾総督府の主導で農業、農産品加工業が中心であり、後期は1930年代からの軍事需要に対応し、重工業と化学工業も導入された。

このように工業化の波を迎える中、1930年代以前の台湾人が何も反応をしなかったわけではなかった。むしろ、1930年代以前から工業化を求めていたと言える。高論文によれば、清朝から台湾社会は新型の産業機械を受け入れることに抵抗はなかった<sup>3)</sup>。例えば、1909年に大稲埕の台湾人茶業者が製茶機械の改良に長年の研究を重ね、製茶用の乾燥機を発明し、日本農商務省に特許を申請した事例もある。当時近代的な工業学校に通ったこともない台湾人たちの工業機械に関する知識は大半現場で学んでいたそうである。これも台湾における機械工業の特徴の一つである<sup>4)</sup>。当時台湾人対象に行われた植民地教育はまだ初期段階で普及しておらず、台湾人は現場で学び、自ら商売、生産の向上を図っていた。1910年代に台湾の社会はすでに機械を使用する能力を持っており、産業機械の自給率も40%あるため、台湾の機械生産化の土台もできていた<sup>5)</sup>。ただし、機械化は必ずしも人件費の節約につながるのではなかった。例えば1930年代のパイナップル缶詰め製造がそうである。1920年代、総督府はハワイからパイナップル缶詰の製造機械を輸入したが、ハワイの機械は台湾品種のパイナップルの処理には向いていなかったため、結局大半の業者は従来通りに台湾の女性従業員による手作業でパイナップルの皮をむいていたという事例もある<sup>6)</sup>。

このように台湾は統治初期から工業化を受け入れる土壌を持っていたが、台湾総督府主導の経済発展は結局日本の需要を優先し、1930年代前期までの産業は米・糖を中心とする農業生産がメインとなった。

具体的に台湾のどの産業がどのように増減したかについては、陳慈玉の「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷(上)(下)」を参照することにしよう<sup>7)</sup>。日本統治期では「台湾の輸出産業は、日本を主な相手とし、且つほとんど唯一の市場として発展した」ことから、陳(慈)論文は歴年の『台湾貿易年表』のデータをもとに、「当時の植民地台湾が宗主国日本に米・砂糖等の生活必需品を提供する義務を負っていたことを意味するだけでなく、さらに時間の推移とともに日本による台湾への農業政策」も変化していたことを指摘している<sup>8)</sup>。例えば、台湾の茶業は日本茶のライバルになり得るため、台湾総督府はそれを奨励せず、日本以外の海外市場を開拓するために紅茶の生産を行うなどの「多元化生産政策」を実施していった。一方、このような状況もバナナ、石炭、パイナップル缶詰など「主に日本本国に流れ、日本から再輸出できない」産業が植民地としての台湾の輸出業の一大特徴であることを表している<sup>9)</sup>。なお、1937年以降日本の軍需生産拡大をきっかけに、台湾の重要軍需工業である軽工業と化学工業が芽生え、当時台湾関連の生産品には工業用塩・無水アルコール・アルミニウム・パルプ・金などがある<sup>10)</sup>。

前述でわかるように、1930年代後半台湾の産業構造に変化が起きていた。農業中心だった産業構造は、軍需生産を目的とする重工業と化学工業が導入され、「工業化」し始めたのである。しかし、小林英夫の研究では、こうも指摘している。台湾の「1940年以降の軍需工業育成政策は、「米・糖」中心の台湾経済、食糧品工業中心の畸形的工業構成を是正するどころか、畸形的な重工業を構築することでそれを促進し」、「電気事業を軸とした化学、金属、機械器具工業の増加は、旧来の砂糖工業の

付属事業としての性格を払拭しきれぬ状態にあるか(機械器具工業)、もしくは日本資本主義の再生産軌道の一環として半製品を日本市場に送り出すか(化学・金属工業)、いずれかの状態にとどまり、見るべき成果もあげ得ず」、結局「米・糖」偏重の経済に大きな変化を与えず、全体として対日経済依存を一層深めていった<sup>11)</sup>。なお、1930 年代後半の台湾労働力構成についての分析では、「産業の畸形性を反映し食糧品工業に従事する労働者が圧倒的に多数を占め(1938 年段階で 5 万 5 千余名、全労働者の 5 割 7 分に該当した)、しかも全産業分野を通じその大半が未熟練労働者であった」ことも明らかにされている<sup>12)</sup>。

例えば製糖業の場合、「小作仁及びその家族の製糖場への労働力動員が可能とされ、農繁期＝甘蔗・米穀栽培、農閑期＝製糖工場臨時工たる所謂「半農半工的形態」の労働者が形成された。一方、熟練労働者たる機械工、製糖工はごく少数の日本人労働者で占められ、台湾人労働者と日本人労働者の労働賃金も大きな差が存在していたことは、台湾の全工業において共通する特徴でもあると小林は指摘している<sup>13)</sup>。

工業化にマイナスな働きをしていた流動的な未熟労働者の存在への改善策は講じられたが、うまくいかなかった。「逆に国民学校(元公学校)卒業者等下級労働者比率が増加」した状況に対し、その原因が台湾に行われている差別教育により、「皇国臣民育成」の初等教育は拡充されたが、大学、専門学校への「台湾人」の入学の道は閉ざされていた」ことにあると小林は述べている<sup>14)</sup>。

筆者のこれまでの研究でも指摘したように、公学校が台湾人に施した教育は、基本的に最初から、人々の関心が政治に向かわないようにすることを目的としていた。愚民政策といっても過言ではない。日本語を教えて、統治の便を図るのが主な目的であり、教科書で学問や勉強を勧めながらも、将来は誠実な奉公人、商売人や労働者になるように仕向けた。そのため、教科書の中には基礎な実学知識がたくさんつめられているにもかかわらず、結局初歩的なものにとどまっていた。では、教科書の中においてこれら産業関連の知識はどのように扱われていたのかについて、実際の教材を用いて説明しよう。

## 2. 国語読本の中の産業関連教材

公学校の国語読本に出てくる物産関連の教材は米・茶・砂糖・塩・台湾の果物・樟脳・アルコール類・石炭など、農産品／農産加工品・化学工業製品・鉱業品等が多岐にわたっている。前述した研究を踏まえ、各時期の産業関連教材の出現頻度を考慮して、「砂糖、米、茶、アルミウム(電気を含む)」教材をセレクトして考察を行う。

### 2-1 米

台湾総督府発行全五期の国語教科書には、第一期から第四期までは「米」、第四期から第五期は「蓬莱米」が採用されている。そのほかにも米に関連する「稲」「稲刈」「田植」などの教材がある。

表 1 日本統治下台湾の公学校／国民学校用国語教科書の「米」関連教材

期数	使用期間	教科書名	教材名
第一期	1901-1914	台湾教科用書国民読本	稲(巻 5)、田植(巻 7)、稲刈(巻 8)、米(巻 8)
第二期	1913-1926	公学校用国民読本	米(巻 8)
第三期	1923-1941	公学校用国語読本(第一種)	田ウエ(巻 4)、米(巻 7)
第四期	1937-1943	公学校用国語読本	稲刈の風景(巻 2)、稲刈(巻 6)、米(巻 8)、蓬莱米(巻 9)
第五期	1942-1945	コクゴ・初等科国語	稲刈(初等 2)、田植(初等 2)、蓬莱米(初等 7)

米関連の教材は低学年の読本から取り入れられ、台湾人の子供たちが日常に親しむような風景を中



心とするものが多い。例えば、「稲刈」(三期巻6の5)では「私のうちでは今日から稲刈を始めました。私は学校がすむと、急いでうちへかへりました。おかあさんはちやうどおべんたうをこしらへておられました。私を見て、「これをおとうさんの所へ持つておいで。お前もあちらで一しよに食べるやうにしておきました。」とおつしやいました。私はおべんたうと茶わんを、かごに入れてかついで、やくわんを手にはぎて行きました。きのふまで一面に金色をしてゐた山手の田は、もうすつかり刈り上げられてゐます。…(後略)」と、会話形式を取り入れながら、子供の生活に密着した内容にしている。



第三期『公学校用国語読本』巻六の五「稲刈」の挿絵

第二期から第四期の「米」は共通して「私どもが食べる白米は、玄米をついてぬかを取ったものです。苗代を作る時から、この玄米にするまでの骨折は大ていなことではありません。ことわざに「粒々辛苦」といふことがあります。まったくその通りです。」(三期巻7の11)からはじめ、米を作るための田植えから、草取り、稲がり、干す、最後倉まで運ぶまでの過程を述べ、米作りの大変さと収穫後の喜びについて述べる内容となっている。

第四期から取り入れられた「蓬莱米」の場合、高学年教材での配置でもあり、内容は「台湾で二度とれる米が内地と同じやうであつたら。」とは領台以来誰しも願ふところであつた」とはじまり、蓬莱米の開発過程とその成功、それから日本の食糧問題にどのように貢献したかを称える内容となっている。

## 2-2 砂糖

台湾糖業の経営について<sup>15)</sup>について、高の研究によれば、日露戦争以前の統治初期、日本側の資金不足により、台湾人による糖業への投資を禁じなかった。しかし、1905年台湾総督府の財政独立により、日露戦争後の1905-1909年の間に台湾製糖工場への日本資本による投資が急速に増加した。さらに1911-1912年間、台風の被害によって台湾糖業が大打撃を受けたときに、総督府が台湾人投資の改良式製糖場を買収したことにより、台湾の糖業が日本資本の主導となる構図が確立された。その後、台湾の砂糖などの農産加工品をもって、日本の重工業産品、化学肥料及び生活に必要な工業用品と交換する構図も徐々に形成された。植民地台湾の「砂糖」が持つ重要性から、「砂糖」をテーマとする教材は全五期の教科書に欠かさず取り入れられている。

表2 日本統治下台湾の公学校／国民学校用国語教科書の「砂糖」関連教材

期数	使用期間	教科書名	教材名
第一期	1901-1914	台湾教科用書国民読本	砂糖(巻6)
第二期	1913-1926	公学校用国民読本	塩ト砂糖(巻6)製糖(巻12)
第三期	1923-1941	公学校用国語読本(第一種)	塩ト砂糖(巻8)製糖工場を見る(巻12)
第四期	1937-1943	公学校用国語読本	製糖工場(巻12)
第五期	1942-1945	コクゴ・初等科国語	製糖工場(初等8)

教材内容は初期の教科書ではごく短く初歩的なものであったが、第三期の「製糖工場を見る」から台湾南部にある新式の砂糖工場を見学する設定で砂糖の製造過程まで詳しく述べられ、2000 字を超える長いテキストとなっている。その内容は同時期の公学校第六学年で使用されている「公学校理科書(第一種) 卷三」の「甘蔗と砂糖」<sup>16)</sup>より高度なものとなっている。その一部を見てみよう。

「(前略)…糖蜜は再び結晶鐘に入れて母液として二番白下にする。これから取ったのが二番糖である。同じやうな手續で三番糖も出来るが、これはそのまゝで市場に出すことはごく稀で、大抵は再びとかして蒸発鐘から出た糖汁と一しょにして結晶鐘へ送るか、又はそのまゝ結晶鐘へ吸ひ込まして結晶の基にする。三番糖から出た蜜にはまだ三割位の糖分が含まれてゐるが、もう結晶しないから、廢蜜として場外へ出して酒精の原料とするのである。…(後略)」

この時期から、廢蜜をアルコールの原料として再利用する技術がすでに展開されていた。第四期と第五期の「製糖工場」は基本的に第三期「製糖工場を見る」の内容を踏襲しているが、第四期の内容に数カ所の添削が行われている。内容に変更のあった部分について、まずは甘蔗から搾れる糖分の量は三期の「九割四五分」から四期の「九割七八分」に直されるなど、数字データの更新である。また、機械や技術の改良改進による記述の更新もある。技術の進歩をアピールするものでもある。注目すべきなのは搾り殻に関する記述の書き足しである。その段落の最後に「最近はこの搾殻を利用して、製紙の原料や重要な工業薬品の製造等に使用されるやうになった」と新たに加えられている。

実は台湾の製糖業の発達により、その副産物の糖蜜や搾り殻は工業用アルコール、代用燃料、製紙の原料となり、「製糖化学工業」とも呼ばれており、糖蜜で生産したアルコールの産量も日本のマーケットを独占するほどであった<sup>17)</sup>。特に「無水アルコールは濃度が 99% になるとアルコールの一種で、動力源としてガソリンと同等の重要性」を持つため、ガソリンと混ぜて使えるので、1935 年以降日本政府が設定した無水アルコールの産量が次第に増加し、「糖蜜原料がしだいに不足していて、糖業試験所の研究を経た後には、サトウキビ絞汁を、原料として直接使用した」ほど需要が増えている<sup>18)</sup>。最終的に、砂糖の原料となる甘蔗の搾り汁は砂糖の生産でなく、直接に代用燃料である無水アルコールの生産に使用されるようになった。

砂糖は植民地台湾の重要な農産加工品だけでなく、統治後期になると、その副産物である糖蜜、無水アルコール等が日本の軍需工業を支えていたのも事実である。それほど、砂糖の生産は植民地期にわたり、最初から最後まで重要な役割を果たしていた。読本の中でも全五期にわたって採用された数少ない教材の一つであった。

## 2-3 茶

台湾茶が有名なのは現代でもよく知られていることであり、日本統治期でも台湾のお茶は重要な役割を果たしていた。しかしそれは、米・砂糖のように日本本土への輸出するのではなく、国際貿易の商品としての重要性を持っていたのである。台湾茶葉の対外市場の開拓は総督府奨励の結果ではなく、茶商(三井財閥)の努力による成果だと指摘されている<sup>19)</sup>。日本本土のお茶市場と競合しないように、各時期の世界情勢などにより、作る茶葉の種類を変更もしくは開発し、輸出先も時期によって調整・変更を行っていた。陳(慈)論文によれば、「日本統治期には茶葉の主要な市場は海外にあり、その輸出額は一貫して当時の台湾の輸出総額の 29% 前後を占めていて、最も主要な国際貿易商品(砂糖は日本に供給されるので国際貿易ではない)」であった。茶商・茶農は、基本的に総督府の販売方針に従うため、台湾現地の多くの消費者のニーズは考慮されていなかった。

米・砂糖とは役割が違うが、「茶」も全 5 期の読本にすべて採用されている。第一期の教材は比較的簡単な内容だったが、第二期から第三期は基本的に共通する構成で、茶の栽培から焙煎、販売までの簡単な流れを述べ、茶の種類についても言及する内容であった。



表3 日本統治下台湾の公学校／国民学校用国語教科書の「茶」関連教材

期数	使用期間	教科書名	教材名
第一期	1901-1914	台湾教科用書国民読本	茶一(巻7)茶二(巻7)
第二期	1913-1926	公学校用国民読本	茶(巻8)
第三期	1923-1941	公学校用国語読本(第一種)	茶(巻7)
第四期	1937-1943	公学校用国語読本	茶(巻7)
第五期	1942-1945	コクゴ・初等科国語	茶つみ(初等3)

具体的な内容について第三期の「茶」(巻7の13)を見てみよう。

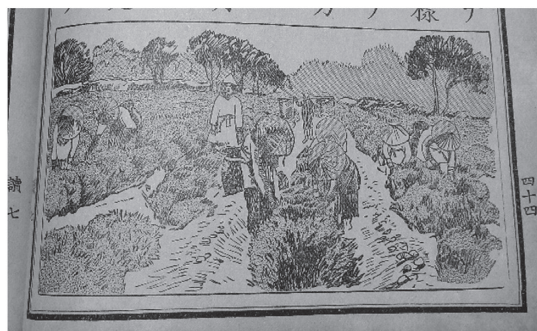
「夏ノ頃台湾ノ北部地方ヲ旅行スルト、アチラコチラノ茶畠ニ、タクサンノ女ガキルノヲ見ルコトガアリマセウ。アレハ茶ツミヲシテキルノデス。腰ニカゴヲツケテ笠ヲカブツタ女ガ、聲ヲソロヘテウタヒナガラ、茶ヲツンデキル有様ハマコトニ面白イモノデス。茶ツミノ季節ハ四月カラ十一月頃マデデスガ、一番多ク取レルノハ四五月デス。

茶畠デツミ取ツタ葉ハ、先ヅザツト日ニアテテシヲラセマス。ソレカラ大キナ炒釜ニ入レテ、火ニカケテタエズカキマゼルト、葉ガヤハラカナナリマス。ソレヲ釜カラ取り出シ、キカイヲ使ツテヨクモミマス。ソノアトデホイロカニカケテカワカスト、粗製ノ茶ガ出来マス。

粗製ノ茶ハ大稻埕ノ茶商ヘ送ラレマス。茶商ハ女エニワルイ葉ヤ茎ナドヲエリ出サセマス。エリワケガスムト、フルヒニカケテ大キサヲソロヘ、ソレカラホイロデカワカシテ箱ニツメマス。カウシテ出来タノガ名高イ烏龍茶デス。

又包種茶トイフノハ再製ノ時、クチナシヤ茉莉ヤ秀英ナドノ花デ、香気ヲツケタモノデス。粗製ノ仕方ハ烏龍茶トアマリカハリマセン。コノ外ニ紅茶トカ緑茶トカイフモノモアリマスガ、台湾デハゴクワヅカシカ出来マセン。

烏龍茶ト包種茶ハドチラモタクサン外国ヘ売出シマス。ソノ取引ハ大テイ大稻埕ノ茶商ガ取扱ツテキマス。」



第三期『公学校用国語読本』巻七の十三「茶」の挿絵

第四期の教科書になると、教材は会話式の記述に変わったが、内容は基本的に以前の内容を踏襲している。しかし、変更になった部分もある。例えば、上記テキストの下線部にある紅茶や緑茶の産量に関する記述は第三期の「ゴクワヅカシカデキナイ」から第四期の「緑茶は、台湾ではごくわづかしな出来ないが、紅茶は、近頃たくさん出来るやうになってきた」になった。前述の台湾茶葉市場の展開過程を見れば、日本の緑茶生産と競合にならないよう、台湾緑茶の生産は「ごくわづか」のままであるのに対し、紅茶の産量は増加したと記述を変更した。「台湾の紅茶は三井財閥の販売促進の努力によって、欧州・米国にも市場を広げ、セイロン・インド・中国の紅茶のライバル」となるほどであった<sup>20)</sup>。植民地台湾の教科書の内容が驚くほど忠実に植民地政府が取っている産業経済政策方針を反映している一例と言えよう。

## 2-4 アルミニウム

アルミニウムの精錬は大量の電力を消費するものである。公学校のアルミニウム教材を説明する前に、まずその製造に欠かせない「電気」についてみてみよう。河原林の「植民地台湾における産業政策の転換期：臨時産業調査会粗描」では「台湾『工業化』構想が展開された直接的な要因は、電源開発による工業立地環境の整備への道が開けたことにあり」、さらに「間接的な要因として『満州事変』、『満州国』の建国に伴う、帝国日本の大陸志向の強化」などがあり、台湾の重要性を保させるために工業化が打ち出されたのであると指摘している<sup>21)</sup>。電源開発というのは、1934年に台湾電力株式会社傘下の日月潭第一水力発電所の完成である。これによって、「日本アルミニウム、台湾電化株式会社、台湾化学工業株式会社等、軽金属、電気製鋼部門の日本独占資本」が台湾へと進出し始めたのである<sup>22)</sup>。つまり、大量かつ安定的に電力を提供するようになったことは台湾「工業化」の決め手となった。公学校の国語教科書には第一期から第三期まで「電気」に関連する教材が取り入れられているが、第一期と第二期は台湾独自作成したものであったものが、第三期の教材内容は同時期の国定本から採用したものとなっている。これら三期の教材はともに電気的重要性とその便利さを中心に述べたものであったが、台湾での発電状況、電機産業については言及していない。もちろん、アルミ産業とのかかわりについての記述もなかった。

表 4 日本統治下台湾の公学校用国語教科書の「電気」関連教材

期数	使用期間	教科書名	教材名
第一期	1901-1914	台湾教科用書国民読本	電気(巻 12)
第二期	1913-1926	公学校用国民読本	電気の応用(巻 12)
第三期	1923-1941	公学校用国語読本(第一種)	電気の世界(巻 12)国定本教材を採用

「アルミニウム」教材は 1937 年以降使用された第四期の国語教科書から取り入れられた新教材であり、第五期の教科書まで採用されている。その内容はアルミニウム研究の歴史と日本におけるアルミニウムの使用状況をはじめ、日常用金属製品や軍用品、飛行機の製造にも用いられることについても言及している。第四期の「アルミニウム」の最後の段落では、「現今我が国のアルミニウムの製造は、ボーキサイトを原料にして、特殊の方法で行はれてゐるが、かつてその精錬に着手しようとした時、外国人は、日本にアルミニウムの精錬が出来るだらうかといつて笑つたといふことである。しかし、今や我が国では、純度百パーセントに近いものを製してゐるばかりでなく、更にその加工方面にも、すばらしい技術を現してゐる」と、技術の進歩を宣揚している。しかし、アルミニウムの精錬に電気が大量に必要であることについての説明はなかった。

表 5 日本統治下台湾の公学校／国民学校用国語教科書の「アルミニウム」教材

期数	使用期間	教科書名	教材名
第四期	1937-1943	公学校用国語読本	アルミニウム(巻 9)
第五期	1942-1945	コクゴ・初等科国語	アルミニウム(初等 5)

第五期の「アルミニウム」は基本的に第四期の内容をそのまま使用しているが、2 か所の添削が行われた。一つはアルミニウムの用途について説明する段落に「粉末は又、塗料としても軍用気球に用ひる水素の原料としても重要である」ことを書き足し、もう 1 か所は最後に「ますます増産につとめて、大東亜戦争の必勝に邁進してゐる」と足したところである。

陳(慈)の調査によれば、当時の日本アルミニウム株式会社高雄工場はオランダ東棟インド会社によりインドネシアからボーキサイトなどの原料を輸入して、精錬したアルミニウム地金を日本本土に運び、製品に加工してから、商品を再び台湾へ輸送して販売するという仕組みになっていた<sup>23)</sup>。すなわ



ち、原料の加工や半製品の製造を植民地が行い、完成品への製造は宗主国が自ら行う、しかもその商品は再び植民地で販売され、植民地の人々が買うといういかにも植民地らしい仕組みである。

### 3. 台湾人児童向けの産業関連教材について

日本統治期台湾人児童が通う公学校で使用されていた国語教科書は、日本語を覚えさせるための読み物ではあるが、総合読本の性質も持ち合わせている。産業関連の実学教材の採択基準も常に「植民地台湾」を意識し、台湾の物産や経済資源に関連する題材を取り入れている。これらの教材も基本的台湾で独自に作成されたものが中心だが、国定教科書から取り入れるものは比較的に少数だが存在している。

実学教材の中の産業関連教材のみを考察の対象とした結果、「米」「砂糖」「茶」「アルミニウム」の4種類の教材の内容と各時期の変化は概ね産業発展の流れに一致していることが確認できた。特に砂糖とアルミニウムは工業化の展開とともに、教材内容の更新やデータのアップデート、もしくは教材の新規採用が行われた。しかし、1937年以降に新たに取り入れられたアルミニウム教材はほかの戦争や軍事教材と同じように、他の教材との横のつながりがうすく、目的をもって個別に取り入れられている印象は否めない。

さらに、「茶」教材に関しては一つ注目すべき特徴がある。台湾の「茶」は台湾総督府の対日本輸出の奨励対象ではなかったが、茶商の努力で海外への重要貿易商品として外貨を稼げる産業である。砂糖、米と並び、全五期の国語読本に「茶」をテーマとする教材が取り入れられている点からもその重要性を示していることがわかる。

なお、教材内容は初歩的な知識が中心であり、作り方の手順や用途などをわかりやすく具体的に説明するのが基本である。ただ、結晶缶、三番糖など、さらに口頭での解説が必要な固有名詞が出てくるのは、「製糖工場」のみであった。高学年の読本とはいえ、結構難しい内容となっている。なお、これら3つの産業はそれぞれ、米は台湾全島、甘蔗(砂糖)は南部、茶は台湾北部を中心に栽培されているので、台湾の子供たちの日常生活に密接したものである。卒業後も関連産業に就職する可能性が高いので、植民地産業としての重要性から教材に採用されただけでなく、児童の生活に密着しての採択でもあったと言えよう。その意味で、小林にも指摘された通り、結局公学校は下級労働者を作り出す場であり、初歩的な知識をあたえることが目的であることを表している。

### おわりに

本稿は台湾の産業発展を軸に、台湾人児童向けの国語読本にある産業や物産関連の教材変遷について考察を行った。教科書の改訂を機に、教材を当時の経済政策に合わせて関連内容を改め、更新しているのが今回の分析で明らかになった。植民地現地の子供として学ぶべきものと、その実際の生活からかけ離れないように内容の取舍選択に配慮している痕跡もみられる。これまで日常生活、学校生活、産業などのテーマを設定し、台湾人児童用の国語教科書について考察を行ってきたが、今後はさらに近代化、文明化に関連する内容を中心に研究を続けたい。

### 【謝辞】

本研究はJSPS 科研費 JP15K17366 の助成を受けた研究成果の一部である。

【注】

掲載教科書写真は筆者個人所蔵のものを撮影したものである。

- 1) 高淑媛、『台湾工業史』(2016.9)、台北：五南、pp136
- 2) 明治大正年間は第一期の「台湾教科用書国民読本」(1901-1914)、第二期の「公学校用国民読本」(1913-1926)が主な教材であった。昭和に入ってから 1937 年頃まで、現場で使用されているのは第三期の「公学校用国語読本(第一種)」(1923-1941)である。第三期の国語読本は統治期において最も長く使われた国語教科書でもある。1930 年代後半、第四期の「公学校用国語読本」(1937-1943)が刊行され、その後国民学校制度の実施によって再び全面改訂が行われ、1942 年から第五期の「コクゴ・初等科国語」(1942-1945)教科書が発行された。
- 3) 高淑媛、前掲書、p118
- 4) 高淑媛、前掲書、p123
- 5) 高淑媛、前掲書、p129
- 6) 高淑媛、前掲書、p129
- 7) 陳慈玉、「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷(上)」、立命館経済学 60(5)(2012.2)、pp659-691。  
陳慈玉「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷(下)」、立命館経済学 61(1)(2012.5)、pp108-130
- 8) 陳慈玉、「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷(上)」、立命館経済学 60(5)(2012.2)、p661
- 9) 同上、pp661-662
- 10) 陳慈玉「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷(下)」、立命館経済学 61(1)(2012.5)、p108
- 11) 小林英夫、「1930 年代後半期以降の台湾「工業化」政策について」、土地制度史学 61 号(1973.10)、p33
- 12) 同上、p33
- 13) 同上、p33
- 14) 同上、p34
- 15) 高淑媛、前掲書、p116
- 16) 台湾総督府、「公学校理科書(第一種) 卷三」(1936.2.10)、pp1-3
- 17) 高淑媛、前掲書、pp138-144
- 18) 陳慈玉、前掲書(下)、p113
- 19) 陳慈玉、前掲書(上)、p659
- 20) 同上、p666
- 21) 河原林直人、「植民地台湾における産業政策の転換期：臨時産業調査会粗描」、名古屋大学論集社会科学編 51(1)(2014.7.31)、pp93-111
- 22) 小林英夫、前掲書、p22
- 23) 陳慈玉、前掲書(下)、pp110-112

Daily Life of the Taiwanese Children under  
the Colonial Government Part 3  
— The Relation between Industry Development and  
Japanese Textbooks of Colonial Taiwan —

CHEN, Hung wen

In studies of the Japanese textbooks of colony Taiwan, the percentage of “the practical science materials” is always high as compared to other materials. The contents include knowledge and skills in life, medical care, basic knowledge about the social system, commerce, industry, etc. Even the introduction of a factory and the machine and the process of producing agricultural produce are also included.

In this paper, I consider the contents of “rice, sugar, tea, and aluminum” materials which were adopted in textbooks and clarified a change and the characteristic that emerged in the textbooks under colonial rule.